



TITLE:

蒲壽庚の國籍問題

AUTHOR(S):

杉本, 直治郎

CITATION:

杉本, 直治郎. 蒲壽庚の國籍問題. 東洋史研究 1952, 11(5-6): 466-476

ISSUE DATE:

1952-07-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138945>

RIGHT:

蒲壽庚の國籍問題

杉 本 直 治 郎

一 蒲壽庚Ⅱアラブ人説

十三世紀の後半、中國における宋元鼎革の際、提舉市舶の官にあつて、大いに活躍した蒲壽庚の事蹟を、はじめて史上にクロージアップするとともに、かれが西域人であつて。しかもそれがアラブ人であることを證せられたのは、いうまでもなく故桑原隲藏博士であつて、その最初の發表は、大正四年（1915）四月、いまの東京大學の史學會大會におふる公開講演においてであつた。

そして原稿は、補正増注されて、同年（1915）十月、翌年（1916）二月および五月、翌翌年（1917）九月、ならびに翌翌年（1918）十月の五回に互り、「宋末の提舉市舶西域人蒲

壽庚に就いて」と題し、『史學雜誌』に掲載された。その後大正十二年（1923）十一月、上海の東亞攻究會から、菊版單行本として出版された、『宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟』は、この『史學雜誌』の論文に、さらに増訂の加えられたものであり、大正十五年（1926）に、當時の帝國學士院賞が授與されたのは、この研究に對してであつた。

博士は、なほ精進努力を續けられ、さらにその完璧を期した上で、ふたたび上梓しようとしていたことは、わたくしたちにも、しばしば漏らされていたのであるが、ついに生前これが實現を見ないうちに、昭和六年（1931）五月二十五日、殘念にも、この世を去られたのであつた。

しかるに嗣子桑原武夫氏の孝心に芽ばえ、羽田亨博士らの

斡旋に實のりて、昭和十年（1935）十二月、東京の岩波書店から、『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況、殊に宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟』四六倍版第一刷が發行されるに至つた。これらの経過は、同書の巻頭に光つてゐる、羽田博士の發刊の辭に委曲を盡している。

桑原博士の該研究は、ただに邦文にて發表されたばかりではない。上海版が出てから五年後、昭和三年（1928）には、

Memoires of the Research Department of the Toyo Bunko

(The Oriental Library) の一として、*On Fu Shou-Keng*

(蒲壽庚) が、廣く海外にも送られた。

またその翌年（1929）、中國では、上海版の漢譯が、題名を異にして、二種までも現われた。一は、上海の中華書局刊行の、南京中國史學會叢書の一冊である、陳裕菁氏の『蒲壽庚考』であり、他は、同じく上海の商務印書館發行の、中外交通史料名著叢書の一冊に數えられた、馮攸氏の『唐宋元時代中西通商史』である。

かくて桑原博士の蒲壽庚Ⅱアラブ人説は、その精緻周到なる研究諸成果とともに、内外に流傳され、三十有餘年間、ほ

とんど定説のごとく見なされて來た。

しかるに近時、中國の張秀民氏は、桑原博士の蒲壽庚Ⅱアラブ人説を駁して、蒲壽庚Ⅱチャム人説を唱えられた一方、前嶋信次氏は、別の研究から、蒲壽庚Ⅱベルシャ人説を述べられてゐる。ここにおいて、わたくしは、これらの兩説を紹介するとともに、私見の一端を記して、こうした説のあることを知らせて下さつた諸氏の學恩に、いささかでも報いることができれば、と念ずるのみである。

二 蒲壽庚Ⅱチャム人説

まず蒲壽庚Ⅱチャム人説の紹介から始めよう。

この説は、はじめ、中華民國三十六年（1947）十二月九日天津で刊行の『益世報』の「史地周刊」第七十一期に、「蒲壽庚爲占城人（Cham）説」として載せられ、ついでそれは翌年（1948）公刊された、『學原』第二卷第七期（頁四一—五九）の「占城人移入中國考」の中で詳論された。同じ論旨は、本年（1951）四月七日、北京發刊の『光明日報』の「歷史教學」第四號に見える、白壽彝氏の「回回民族底形成」に

對する、張秀民氏の來信の中にも窺われる。同紙には、その上、張氏の說に對する、白氏の批判をも併記している。

ここには、しばらく便宜に従い、發表の先後によつて、桑原博士の蒲壽庚Ⅱアラブ人説る舊説と稱し、張秀民氏の蒲壽庚Ⅱチャム人説を新説と呼ぶことにする。

この新説に對し、その唱道者張秀民氏は、今西春秋氏ならびに日比野丈夫氏を二重に介して、わたくしに、その批判を求めて來られた。わたくしは、これらの諸氏の好意によつてはじめてこの新説に接した喜びを感謝せずには居れない。

いま、該新説を紹介するに當つて、これを舊説と比較對照するのが、わかり易からうと思われる。張氏が新説を主張される第一の理由は、蒲壽庚の蒲姓についてである。

舊説では、蒲は、回教徒（Ⅱイスラム教徒）の名乗に見出されるもので、本來、アラブ人の姓であるから、大食（Ⅱアラビア）人に關する中國の記録に、多くの蒲姓の見えるわけであるとなし、これをもつて、蒲壽庚のアラブ人であるという、一つの論據にされている。

これに對して、新説では、中國の記録において、蒲姓の見

えるのは、ただにアラブ人に限つたことではなく、宋代には勿論、その他の時代にも、チャム人の占城國に、いずれかと、いえば、大食の場合よりも、より多く見出されるとなし、それゆえ、姓が蒲であるからとて、アラブ人でなければならぬということはなく、それがチャム人であつたとて、差支えないではないか、というのである。

もとよりこれだけでは、蒲壽庚が、ともすると、チャム人であるかも知れない、とはいへても、かれが、チャム人でなければならぬ、ということとはならぬ。そこで第二の理由が擧げられる。それは、蒲壽庚の祖先に關してである。

舊説では明の何喬遠の『閩書』に、蒲壽庚の父の蒲開宗に至つて、廣州から泉州に移住したと記しているので、南宋の岳柯の『程史』に見える、番禺（Ⅱ廣州）にいた富豪の蒲姓を、蒲壽庚の祖先—おそらくは祖父—であろうと見なし、さらにそのものは、「もと占城の貴人である」と記しているのを、「當時占城にアラブ商人の假寓した者が尠くない筈故、この蒲姓も、もと占城に僑居したアラブ商人と認むべきであろう」（東京版、頁一一四—一一五）と解されている。

新説では、舊説の『程史』所載の番禺の蒲姓を蒲壽庚の祖先——おそらくは祖父——というのに同意し、それゆえ、『程史』は基すき、蒲壽庚は、占城人すなわちチャム人でなければならぬ、と文字通りに認められた。そのため舊説にて、これを「占城に僑居したアラブ商人」と解されているのを、「曲解」であると評せられた。

されどこれは、『程史』に見える番禺の富豪の蒲姓が、占城の貴人の後であるというので、その蒲姓を、蒲壽庚の祖先——おそらく祖父——と見なすという前提のもとに、間接に、蒲壽庚が、占城人すなわちチャム人であるというのであつて、いまだ直接に、蒲壽庚がいすこの國人であるかを、いつているのではない。そこで第三の理由として、蒲壽庚自身が、どこの國人であるかという、信すべき記録を擧げる必要がある。

舊説では、『閩書』に、「蒲壽庚は、その先さは西域人」とあるので、かれを西域人となし、西域人のうち、アラブ人の名乗る蒲を姓とするがゆえに、それをアラブ人であろうと断定されている。

新説では、『閩書』が、明末に成つたものゆえ、宋末元初の蒲壽庚よりは、はるかに後世の書であるから、それに西域人と見えていたとて、それをもつて信するに足らないとなし、さらに、かれも同時代の書を検するを要するとて、『心史』に依據すべきを説いている。

これについては、桑原博士が、すでに詳論されたところであつて、博士によると、『心史』は、蒲壽庚と同時、同郷の鄭所南の著であつて、それは、『四庫全書總目提要』には、後世の僞作のように述べられているけれど、仔細に検討すれば、これこそ、もつとも信すべき、貴重な史料であると斷ぜられてゐる。はたしてしからは、その書には、「蒲受叻（＝蒲壽庚）の祖は南蕃人」と見えていて、西域人とは記されてゐない。

蒲壽庚が、もと、どこの人であつたか、その當時の記録としては、この書を外にしては、他に求められないので、これを根據として、推測しなければならない。

舊説では、『閩書』の西域人説によるがゆえに、この『心史』の南蕃人説を、いかにこれと調和されたかというに、「

アラブ人ならば、南蕃人と稱しても、西域人と稱しても、事實少しも差支ないのである」(東京版、頁一一〇)と解し、「大食國人は、多く南海より支那に通商するが故に、また南蕃と稱することを得べし」(同、頁一二五)と注されている。

新説では、これに對し、西域人は、南蕃人でなく、南蕃人は、どこまでも南蕃人であつて、西域人と混同することはできないとして、兩者を同一視しようとする舊説をもつて、「いまだ牽強附會を免れない」と見なしている。しからば、この場合、いかにしてこの南蕃人をば、占城人と解することができるか。これ第四の問題點である。

新説では、これについて、『咸豐瓊山縣志』(卷一一)を引き、「至元の初、駙馬駿都右丞が、占城を征したとき、その國人の降るもの、ならびにその父母妻子を納れて、海口浦を發いて安置し、營籍を立てて、南蕃兵となした」とあるので南蕃兵は占城兵と解することができる。とせば、南蕃人(南蕃人は占城人)チャム人と解することが、できるではなからうかというのである。

これを要するに、蒲姓について、舊説では、これをアラブ人の姓と解するのに對して、新説では、チャム人のそれと見なし、祖先について、舊説では、『程史』に「占城の貴人」とあるを、占城に僑居したアラブ商人と解するのに對し、新説では、それを文字通り、占城の人と認めている。また舊説では、『閩書』の「西域人」とあるのを取りあげているのに對し、新説では、これを後世の傳説として排し、舊説では、『心史』の「南蕃人」を「西域人」と同様に解し、新説ではこれを斥けて、「南蕃人」を「占城人」と解している。かくて舊説では、蒲壽庚はアラブ人説となり、新説では、蒲壽庚はチャム人説となつたのである。

三 蒲壽庚はペルシア人説

つぎに、蒲壽庚はペルシア人説の紹介に移らう。

こうした説が、前嶋信次氏によつて唱えられていることを和田清博士から教えられたわたくしは、早速、同氏へ問合せたところ、懇切な書信をいただいたので、ここにその説の概略を知ることができた。兩氏の芳情に對しては、うたた感激

を禁じ得ない。

前嶋氏によると、この説は、本年(1951)七月四日、東京慶應大學の三田史學會にて發表されたもので、近く同會發行の『史學』に掲載されることになつてゐるとのことである。それゆゑ詳細は、これに譲ることとし、ここでは同氏の報道に基づき、その要點を紹介するだけである。

もしも前述のごとく、蒲壽庚の國籍に關する最初のアラブ人説を舊説とし、ついで現われたチャム人説を新説とすれば最後に出たこのペルシア人説は、最新説といふべきであらう。そこで、ここでは、蒲壽庚Ⅱペルシア人説を、便宜に従つて、最新説と稱することにする。

この説が、舊説と相違するのは、つぎの諸點である。

第一、その名乗のクンヤ(Kunya)について、舊説では、蒲壽庚の蒲が、アラブ人に普通なアブーの對音であると思はれるので、その祖先が、『心史』に南蕃人とあり、『閩書』に西域人とあるのは、ともにアラブ人と解することができるというのに對し、この最新説では、アブーのクンヤの形はかならずしもアラブ人の間に限つたことでなく、ペルシア人の

間でも、トルコ系民族の間でも、クルド人などの間でも、可なり廣く行われているから、ただこれだけでアラブ人と決定するのは、理由が薄弱であるといふのである。

第二、『程史』に、廣東から泉州に來たという蒲一家が、占城の貴人であると思えるのを、舊説では、占城に僑居したアラブ商人であると解されているけれども、最新説では、廣州にも、もろもろの異邦人がいた關係上、それをアラブ人であつたと限定することは、できないといふのである。

第三、しからば、蒲壽庚がペルシア人であつたであらうといふのは、なにによつていわれるのであらうか。前嶋氏の研究の中心は、蒲壽庚の國籍問題でなく、實は南宋から元にかけて、泉州に有力なるペルシア人(それもアルメニア、アゼルバイジャン方面の北系のもの、中にはアルメニア人なども、随分まじつていたと考えられるが)のコロニーがあつたことの研究で、アラビア文字の碑文や墓碑、中國の史料、ならびに元代の西歐人の報告などによつて、これを立證しようとされたものである。

その結果、泉州には、有力なるペルシア人のいたことが明

らかとなつたので、そこで活躍した蒲壽庚を、アラブ人と考
えるよりも、ペルシア人と見なす方が、可能性が多いのでは
ないか、というわけである。

第四、蒲壽庚をペルシア人とすれば、西域人であるという
のは當然であり、またこれを南蕃人ということも、當時の史
料に、ペルシア人を南蕃人と呼んでいるものもあるので、差
支えないわけであり、また占城方面には、アラブ人とともに
ペルシア人も、いたことが認められるので、かれが占城の貴
人の彼であるということも、あり得ないではなからう。

要するに、蒲壽庚の蒲姓について、舊説では、これをアラ
ブ人と解しているのを、最新説では、その根拠を薄弱となし、
また廣州から泉州に移つた蒲一家を、舊説では、アラブ人と
解しているけれど、最新説では、廣州には、もろもろの異邦
人がいたので、それをアラブ人と限定することはできないと
なし、そこで蒲壽庚は、當時、泉州にコロニーをもつて、大
いに活躍していたペルシア人と考うべきであり、ペルシア人
とすれば、これを西域人というのは、當然であり、またペル
シア人を南蕃人といった實例もあることであり、さらに占城

に僑居していたペルシア人もいたので、占城の貴人の後と見
えることも、ありそうなことであるというのである。かくて
最近になつて、蒲壽庚はペルシア人説が、唱道されるに至つ
たゆえんである。

四 蒲壽庚の國籍に關する諸説批判

以上、蒲壽庚が、どの國人であつたか、その國籍に關し、
最初に發表された桑原博士が、「蒲壽庚は、蓋しアラブ人即
ちイスラム教徒であらうと斷定」された舊説に對して、まず
張秀民氏の、チャム人であるという新説が出で、さらにまた
前嶋信次氏の、ペルシア人であらうという最新説が現われ
た。そこで、これら三説のうち、いずれの説が、もつとも信
憑するに足るものであらうかという、最後の批判が、いまや
残されることとなつた。

ところが、これら三説の、それぞれが主唱される、基礎と
なるところの史料には、いずれも決定的なる、いわゆる「決
め手」となるものがないといつてよい。すなわち、蒲壽庚が
大食人である、と確證すべき根本史料がないと同様に、かれ

が、占城人である、と確認すべきそれもなく、また波斯人ではない、ともしない、というそれもない。ただ、それぞれに解釋され得る史料が、存するといふだけである。

されば、蒲壽庚は、アラブ人であるか、チャム人であるか、はた、ペルシア人であるかという問題は、史料の解釋に當つて、いずれの解釋が、より妥當と考えられるかという、解釋の問題にはかならない。

舊說に對して、まず現われた新說の蒲壽庚ハチャム人說は蒲壽庚が、西域人の後であると傳えている中國の史料をもつて、後世のものであるとの理由で、信するに足らずとなし、當時の所傳である南蕃人というものこそ、もつとも信すべきであるとし、しかしその南蕃人は、占城人すなわちチャム人を意味すると説いている。

この説を唱えている張氏は、蒲壽庚の蒲をば、むしろ占城人に多き姓であつて、アラブ人のそれと、關係がないように考えられているが、これは、やはり舊說のごとく、アラブ人のそれと見なすが、より妥當なようである。このことは、つぎに擧げる事例からも、推察されよう。

すなわち、北宋の樂史の『太平寰宇記』（卷一七九）によると、五代の周の顯慶五年（958）、占城國の使者蒲訶散が中國に來貢している方物の中に、「薔薇水」があるが、この「薔薇水は、大食國の花の露なり」と、南宋の趙汝造の『諸蕃志』（卷下）に説いているごとく、それが、大食國すなわちアラビヤ國の産であつたと認めずばなるまい。また『宋會要』蕃夷、占城の條には、北宋の建隆二年（961）正月、占城國の使者蒲訶散らが、中國へ献上している品物の中に、「大食瓶」とあるのが、その名に負うごとく、大食の生産品であるは、いうまでもなからう。この蒲訶散は、前の蒲訶散や後に同書に見える、開寶五年（963）三月、および淳化元年（990）十月に來朝している蒲訶散と、同一人の名であると思われる、しかして、後の場合には、その貢獻物の中に、大食の薔薇水が見えているのである。

かように、占城國から中國の朝貢品に、大食すなわちアラビアの産物が見出されるのは、それを中國へ齎した蒲訶散がアラビアの人名にしばしば見られる Abu-H Hasan の對音であると思はれるとき、そこには占城すなわちチャンプを足

場とする、アラブ人の中國における朝貢貿易の活動が、書き出されるのではなからうかと思われる。もしもそうだとすれば、蒲は、チャム人の姓と解するよりも、アラブ人のそれと見なすべきであろう。

さらに、そうした適例を挙げてみたい。

『宋會要』歷代朝貢によると、北宋の天禧三年(1019)五月に、大食國から中國へ遣わされた副使に、蒲加心の名が見えるが、これは大食國の使節であるので、明かにアラブ人と解してよからう。従つてそれは、アラブ人の豫言者ムハメットのクンヤと同じく、Abu'l-Kasimの對音と見なされよう。しかるに、これとまつたく同名の蒲加心が、それより四年前、大中祥符八年(1015)二月に、注輦國すなわちチュールヤーン國の副使として、中國に來貢していることが見えていゝ。これは、いかに解すべきであらうか。

大食國の朝貢副使の蒲加心が、Abu'l-Kasimであるとすれば、注輦國の朝貢副使の蒲加心も、また Abu'l-Kasim であるはずで、ともにアラブ人と見なされるべきであらう。しかし兩者が、中國へ來たのは、わずか四年の開きがあつただ

けなので、あるいは同一人であらうと考えられないことはない。もしもそうだとすると、インド東南海岸の注輦國を足場として、中國へ朝貢貿易に來た蒲加心が、四年後には、本國の大食の名において、同様、中國へ來貢したものということになる。

たといこれらが、同名異人であるとしても、ともにアラブ人であることには、變りはあるまい。これと同様、占城國使蒲訶散の場合も、これをアラブ人と解して、少しも差支えないであらう。しかるに占城國の場合のみ、その蒲姓をアラブ人でないと解するのは、到底妥當な見解ということではまい。

けだしアラブ人の名乗るアブー (Abu) は、實は本當の名ではなくて、その姓 (Kunya) であるが、日常、人を呼ぶとき、たびたび本當の名が忘れられるほどに、一般には、しばしば、これが用いられるのである。そしてこの Abu は、ときどき Bu と略されるので、(The Encyclopedia of Islam, Lyden & London, 1913, Vol. I, pp. 73-74) 蒲は、まさしくその對音であると見なされよう。

思うに蒲壽庚が、十三世紀後半、中國における宋元鼎革の際、大いに史上で活躍し得たのは、かれが當時、世界有数の貿易港たる泉州において、長く提舉船舶司の權を掌握し、受けつぎたる遺産の上に、その地位を利用して蓄積したる、大なる商業資本を擁して、牢固たる財閥を構成していた經濟的な基盤の上に、政治的にも勢力を振るうに至つたものと見られる。しかもこうした基盤は、さらに大なる世界史的構造の上に、築かれていることを忘れてはならない。

新陸地の發見に伴い、ヨーロッパ人の移動の波が、澎湃としてアジアに押し寄せて来る以前、東洋と西洋との中間にあつて、通商航海上の媒介的役割を果していたアラブ人は、唐より宋ならびに元を経て明に至る、約七世紀ばかりに互つて、ほとんど南海貿易の利をほしいままにしていたといつてよい。南宋の周去非の『嶺外代答』（卷三）に、「諸蕃國の富盛にして寶貨の多きこと、大食にまさるものがない」といつているのは、このためである。従つてアラブ商人が、南海各地より南シナにまで移住植民し、そこに中繼貿易に従事しているもののあつたことは、當然認められてよいであらう。

南海各地を足場とする朝貢貿易のごとき、たまたま中國の史料に残された、その片鱗に過ぎまい。

桑原博士の蒲壽庚の事蹟は、實にそうした背景をもつて、かれをアラブ人として考察されたのである。これに對して張氏の説は、いかに考えられているのであらうか。

氏によると、宋代には、中國人にして、占城にあつて商販するもの、すこぶる多く、第二三代の華僑ともいふべき、「土生唐人」がいたうちに、巨商の陳惟安や、占城國王鄒時巴蘭と「知熟」の間柄であつた陳應のごときは、海舶を擁有して、本國との貿易に従事していたが、いずれも福建人であつたようである。福建と占城とは、水道相去ること、比較的近かつたので、福建人で、居を占城に移し、子孫を長養したのであらうし、その逆に、記録にはあまり見えないが、占城人にして、また中國に來り商販して、泉州に入籍したものもあつたであらう。それだから、蒲壽庚が、占城人であつたとて、かならずしも怪しむに足らない、というのである。けれどもこれだけでは、占城國以外、大食國、注輦國、三佛齊國、勃泥國、海南島など、廣く南海各地で活動していた、多くの蒲

姓の説明は、到底できないではなからうか。

かように考えて来ると、蒲壽庚Ⅱチャム人説は、ほとんど成立の可能性で乏しくなるに反し、蒲壽庚Ⅱアラブ人説は、一そう可能性があるように思われそうである。

しかしながら、前嶋氏の蒲壽庚Ⅱペルシア人説が出るに及んで、アブーは、かならずしもアラブ人の間だけでなく、ペルシア人その他の間にも行われているとともに、蒲壽庚が活躍した舞台の泉州には、アラブ人の居留地はなかつたが有力なるペルシア人のコロニーのあつたことが實證されたので、蒲壽庚をアラブ人と考えるよりは、むしろペルシア人と見なす方が、この場合、可能性が多いではなからうかということになつた。

もしも泉州のペルシア人居留民と、蒲一家との關係が、判然とするならば、蒲壽庚がペルシア系であるという推察は、一そうはつきりとするであろうが、今日までのところ、そうした史料が、いまだ發見されていないのは遺憾である。

案するにペルシア人の東方進出は、古代からして、相當目ざましいものがあつたと思われるに拘わらず、それを跡づける記録に、はなはだ乏しい憾があるのは、一體、なにゆえであらうか。

これについて前嶋氏は、こう考えられている。アラビア文

字の影響を受け、パハレヴィ文字 (Pahlavi, Pahlavi, Pahlavi) が廢止されたために、それを公に用いていたサーサーン朝ペルシアの文献は、きわめてわずかしが、傳わらなかつたのでなからうか。従つてその結果、ペルシア人の活動した實際の様相も、記録の残されている、アラビア人の活動の影に、かくされてしまつたのでなからうか。こうした感を抱かしめるのである。同様な感じは。わたくしの胸にも、宿されて來たことを附言せざるを得ない。

それに、ともかく、蒲壽庚Ⅱチャム人説に比べて、蒲壽庚Ⅱアラブ人説が、はるかに妥當性をもっていることは、たしかにいい得るにしても、さればとて、それに違ひないと斷言するところまでは、至つていないごとく、蒲壽庚Ⅱペルシア人説も、そうであると、斷定の下せる程度には、いまだ達していない。とはいへ、これを蒲壽庚Ⅱアラブ人説に比するとき、蒲壽庚Ⅱペルシア人説の方が、より可能性が多いといつても、あえて過言ではないように考えられよう。

約言すれば、蒲壽庚の國籍問題について、かれをチャム人と考えるよりは、アラブ人と見なす方が、よりよいと思われ、さらに、ペルシア人と考えるのが、いまのところ、もつともよいように思われるというのが、わたくしの考である。

(1951, 9, 10)